

外来系から在来系へ — 甲斐のS字甕の変遷 —

小林 健二

1 はじめに	4 編年
2 「在来系土器」としてのS字甕の評価	5 考察
3 分類	6 まとめ

1 はじめに

新しいものを受け入れようとするとき、同じ機能・用途をもつものであっても、より性能が優れたもの、より便利なものを選ぶ。遠い過去の時代、それが日常生活と密接に関わる土器であった場合にはなおさらのことであろう。そうすると今度は自分達でそれを作り、消化していく、いつしか自分達のものとして以前から存在したかのようになる。もはや「新しいもの」ではなくになっているのである。一方では、これまでの伝統的なものをそうあっさりと捨てられるものではなく、わずかではあるが残存する。それでも時代の変革期においては、新しいものは伝統的なものに勝るのか。それとも…。古墳時代初頭、東海からやってきた新しい台付甕はどれほど新鮮に人々の目に映ったことであろうか。

S字状口縁台付甕（以下S字甕とする）は、近年その分布域をさらに広げ、依然として注目され続けている土器である。S字甕が主要な煮沸具として定着した甲斐¹⁾においても同様で、出土する点数は止まるところを知らず、古墳時代初頭の土器の一器種となっている。

S字甕の型式分類・編年に関する研究は大参義一氏²⁾、安達厚三氏³⁾を経て、赤塚次郎氏⁴⁾によって行われてきた。甲斐においても、その型式変化を追いやすいことから、弥生時代末～古墳時代初頭の土器を分類した中山誠二氏⁵⁾、坂井南遺跡出土の土器を分類した山下孝司氏⁶⁾、また前期古墳との対比からとらえた橋本博文氏⁷⁾による編年がそれぞれ行われている。そして近年の資料の増加によって、甲斐と東海地域との関係、古式土師器の成立、さらには弥生時代と古墳時代の境界線を明らかにしてくれるであろうという期待がもたれてきた。しかし資料が増えれば増えるほど混沌とし、かえって複雑な様相を呈していることもまた事実である。大参氏・安達氏・赤塚氏が提示した分類と編年は、尾張、大和・伊勢、濃尾平野におけるものであり、独自のS字甕として定着する地域においては別の変化を遂げる所以である。a類・I類・A類のような初源的なもの、搬入品・忠実な模倣品を除いて、決して対比できるものではないことは過去に述べたところである⁸⁾。単なる「横のつながり」として地域を結ぶような代物ではなく、甲斐のS字甕を新たに分類することは、もはや避けられない状況となっている。独自に変化するとはいえ、その出土点数と形態的特徴から、古式土師器の中ではS字甕が編年の基軸である

ことには変わりはない。小稿ではもう一步踏み込んで、甲斐のS字甕を改めて見直し、その変遷を追うことにしたい。

2 「在来系土器」としてのS字甕の評価

外来系土器であるS字甕がいくつかのプロセスを経て定着し⁹⁾、在地化する。起源地である濃尾平野のS字甕の型式と、他地域へ移動し定着したS字甕が辿る型式の変化の違いは、駿河・毛野ではすでにB系統S字甕として指摘されている¹⁰⁾。筆者もかつて、S字甕が甲斐に定着し広く普及する過程について検討を行った。しかし、そこでは定着の仕方についての考察に重点が置かれ、その後在地化したS字甕の展開と終焉までの経過については触れることができなかった。定着したS字甕がどのような方向性をもち、変化を遂げていくのか、そういった段階を的確にとらえなければならない。

弥生時代末から古墳時代初頭にかけて、土器の移動現象に関する研究は注目されて久しい。1991年秋に浜松で開催された第8回東海埋蔵文化財研究会『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』はその集大成ともいえる。そこでは東海地域と東日本との併行関係が一応明確になったかのように見えた。しかし各地域での東海系土器の圧倒的ともいえる出土量は、研究会のテーマの一つであった、「東海地域と東日本の土器編年との整合性＝土器編年の妥当性」を、果たして確認できたといえるだろうか。これまで述べられてきたのは、S字甕に代表される東海系土器の「分布」と「移動した時期」とその「搬入経路」などであった。圧倒的な出土量を誇る東海系土器の、一方的な東海地域からの波及ばかりが強調され、「受け入れる側の姿勢」というものが、以外にも楽観視されていたようである。特に、定着する器種については、新たな解釈が加わる段階を重視せず、単に起源地のものに対比させた編年が作られてしまっているのではないだろうか。

各地域で出土するものには小型品・3連品・口縁部だけをS字状にしたものなど非常にバラエティーに富んだものが存在しており、赤塚分類には到底対比できないものばかりである。これらは加納俊介氏によって「さまざまな変種のS字甕」として紹介されている¹¹⁾。また氏のいう「異所的変異」は、各地域の独自の解釈から生まれてくるものであり、定着型のS字甕が辿る型式の変化については、「地域色」の存在を認めなければならない。起源地のものとの対比ができないことをここまで強調してくると、それは「趣(おもむき)」とか、「雰囲気」というレベルで片付けられる問題ではない。地域色をもつS字甕は、全く別の型式として認定しなければならない。

各地域で出土する東海系土器には、多かれ少なかれ独自の解釈が加わり、定着した場合のその変貌ぶりは、浜松シンポでの3分冊からなる各地の土器の実測図を見ても明らかであろう。定着することによって、全く独自の方向性のもとに、土器は外的にも質的にも姿を変える。そこにはもはや「よそもの」としての概念は存在しない。その時からは「在地化した土器」というより、「在来系土器」¹²⁾と呼んだ方が正しいであろう。「在来系」として存在し続ける土器の、その根底にあるものはいったい何か。S字甕はそれを教えてくれる可能性をもっている。

S字甕ばかりに目を奪われがちであるが、それでも地域を越え、強い影響を与える、その卓越性は揺るぎないものである。甲斐においても資料的によく惠まれてきており、やはりS字甕を優先させたいのである。そして今後は定着してからのS字甕に評価を下し、「在来系土器」としてのS字甕の存在を強調したいのである。

薄い甕を作ることへの憧れから、それを「見よう見真似」で作り始める。それが口縁部の屈曲、体部の形態などにわずかな違いとなって現れ始める。やがて目に見えて明らかな違いとなり、独自の製作技法が確立されていく。ついには自分たちの型式を作り上げる。その時には、「外来系」のS字甕は既に「在来系」のS字甕へと変化しているのである。

3 分 類

以上の点を踏まえ、近年の資料の紹介とも合わせ、甲斐のS字甕を分類していく（第1図）。口縁部の屈曲、頸部内面のハケメ、肩部外面のヨコハケ、体部の形態の変化を追い、これらの微妙な変化をもとにさらに細分することにする。多数のS字甕を分類するのであるが、一個体=一型式となるものもある。果たしてそれが資料の偏りなのかどうか、現状ではわからない。

I 類

甲斐において近年特に顕著な存在である。これまで全く稀有な存在と思われていたものであるが、その数を急激に増やしている。坂井南遺跡（韮崎市）¹³⁾57号住居址、後田遺跡（韮崎市）¹⁴⁾C区5号住居址、村前東A遺跡（中巨摩郡櫛形町）¹⁵⁾に続いて、米倉山B遺跡（東八代郡中道町）¹⁶⁾8号住居址から7個体分が出土し、現在最も注目される資料である¹⁷⁾。口縁部上段は突出が少なく平坦面を持ち、先端は鋭く尖るものと丸みを持つものが存在する。中段は垂直に立ち上がり、外面に押引刺突文を施す。体部外面にはハケメを施すが、S字甕独特の「羽状」にはなっていない。頸部内面から体部内面にかけてもハケメを施し、その後体部内面は指ナデによりハケメをナデ消すようになる。器壁は全体的に厚く、まだ定型化していないことが窺える。底部内面には孤状に指頭圧痕を配している。脚台部は大きく開かず、端部の折り返しがみられないが、やや八の字状に開き、後出的なものもある（5）。体部の形態により、肩が張らず長胴を呈するものをI a類（1・2）、やや肩が張るものをI b類（5～7・11～13）とする。I a類は口縁部の刺突文が粗いが赤塚分類A類古段階に、I b類はA類新段階にそれぞれ対比できる。

このようなものに対して、竹の内遺跡（東八代郡八代町）¹⁸⁾出土例（14）は、口縁部外面の刺突文は粗く、体部は球形を呈し、I b類の範疇に入るが、体部内面をヘラケズリするという製作技法上の問題と、小型品ということから分類し、I c類としておく。また村前東A遺跡では、口縁部外面下段にノの字に沈線を刻み、その間に刺突文を施したもの（15）が出土している。かつては肩が強く張ることから赤塚分類B類の特徴をもつことを指摘したが、口縁部の刺突文を重視し、I類の中に含め、I d類としておく。

各地域でみられるのは、ほとんどが赤塚分類A類新段階の資料である¹⁹⁾。しかし、甲斐にお

いてはやや状況が異なるようである。米倉山B遺跡出土例でI a類とした（1・2）は、明らかにA類古段階の特徴を残している。また、竹の内遺跡出土例のような小型品は他に類例がなく、既に別の用途が与えられていた可能性も否定できない。さらに、これら甲斐でのA類は、すべてが在地品とみられ、濃尾平野のものとは明らかに胎土が異なり、起源地からの搬入品ではない²⁰⁾。

こういった状況から、甲斐ではA類の段階から独自の製作が始まっている、一定の期間使用されていたことが考えられる。その結果I c類・I d類のような起源地のものとは逸脱した、かなりのバリエーションが存在するのである。それはこれまでの状況を覆すものであり、「在来化」が早くから始まっていたことを暗示するものである。

II 類

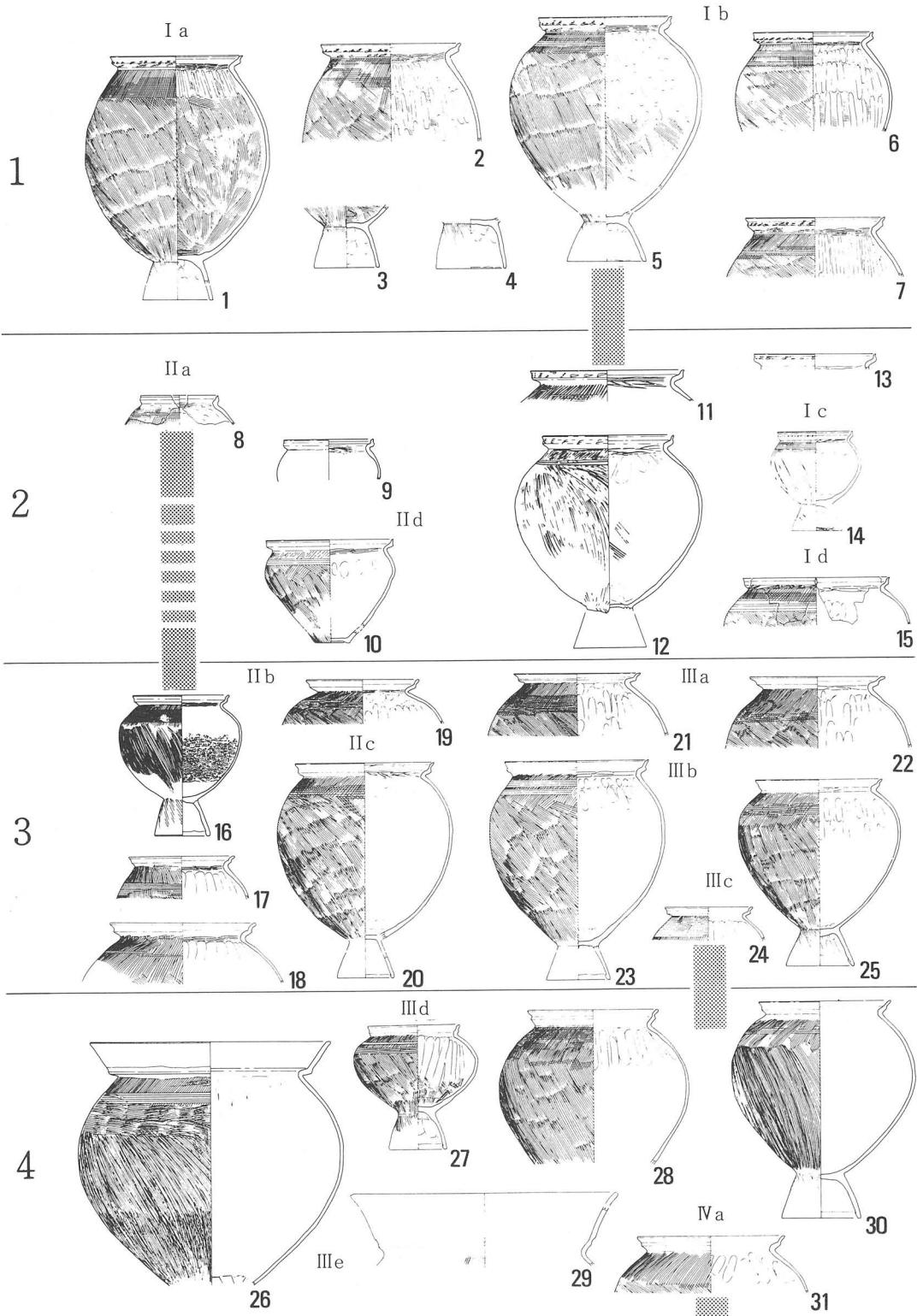
口縁部中段外面の押引刺突文は省略される。体部内面のハケメは省略されていき、頸部内面のみにハケメを施すようになる。器壁は薄く仕上げられ、優秀な煮沸具として完成されていく。脚台部は端部を折り返すようになる。

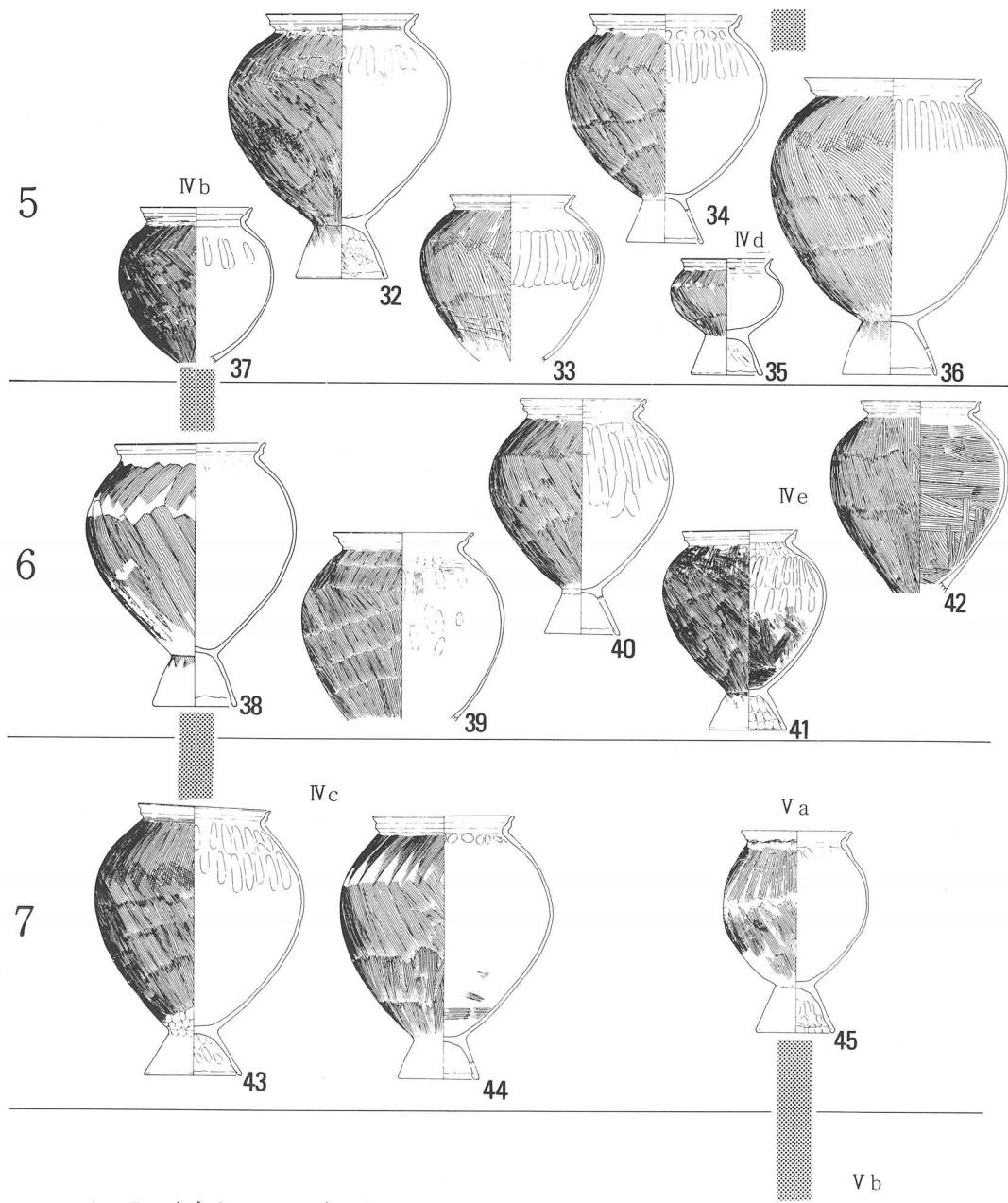
I類の要素である口縁部各段が鋭利な屈曲を残しているものをII a類とする。現時点での資料はきわめて少なく、東山北遺跡（東八代郡中道町）²¹⁾ 2号方形周溝墓から、赤塚分類B類古段階の搬入品（8）が出土している。このような小型品は濃尾平野から直接持ち込まれたものであろう。甲斐で出土しているS字甕の中で、濃尾平野からの搬入品といえるはこの1点のみである。坂井南遺跡55号住居址出土例（16）は体部は球形を呈し、内面にハケメ、脚台部外面に不連続ナナメハケを持つ赤塚分類B類古段階の特徴をもっているが、口縁部はヨコナデによって作られ、鋭利さを欠き、端部は丸みを持っている。II b類は、I類に比べ体部から口縁部下段への屈曲が鋭利になり外反する。久保屋敷遺跡（韮崎市）²²⁾ 1号住居址出土例（19）は赤塚分類B類新段階に対比できる。II c類は口縁部が外反せず立ち気味のもので、村前東A遺跡4号住居址出土例（20）は、口縁部が工具によるナデで屈曲が明瞭で、体部外面の羽状ハケは何回も重ねられている。赤塚分類B類中段階に類似しているが、頸部の窄まりが小さい。坂井南遺跡57号住居址でI b類と共に伴っている（9）は、体部をナデによって仕上げた小型品であり、また村前東A遺跡出土の（10）は脚台をもたない平底の甕で、体部のハケメが不規則である。これらは口縁部の作りはII a類と同じであるが、形態・製作技法の違いからあわせてII d類としておく²³⁾。

II類では口縁部にヨコナデの採用が始まり、頸部の窄まりが小さいなど、II c類以降、甲斐のS字甕の特徴が見られ始め、赤塚分類に対比できないものが多くなっていく。一方ではII d類としたものの存在も見逃すわけにはいかない。

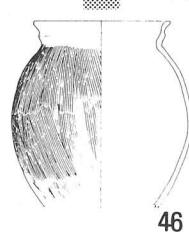
III 類

頸部内面のハケメを省略したものが中心となる。口縁部が大きく外反し、上段端部に沈線を巡らすものをIII a類とする。久保屋敷遺跡1号住居址出土例（21・22）は肩の張りも強く、赤





- 1 ~ 7 米倉山B 8. 東山北
 9 • 11 • 16 • 26 • 30 • 35 • 38. 坂井南
 10 • 13 • 15 • 20 • 23 • 39. 村前東A 12. 後田
 14. 竹の内 17 • 18 • 24 • 28 • 29 • 31 • 33 • 34 •
 36 • 40 • 42 • 44 • 46. 西田 19 • 21 • 22. 久保屋敷
 25. 京原 27 • 41 • 43. 姥塚 32 • 37. 保ノ下
 45. 宮ノ下



第1図 S字甕の変遷 (1 : 8)

塚分類C類古段階に対比できる。III b類とした村前東A遺跡4号住居址でII c類と共に伴している(23)は、口縁部の屈曲が明瞭ではあるが、肩の張りは弱く、頸部下から施される波打つようなハケメのあり方が濃尾平野のものとは明らかに異なる。口縁部が立ち気味で、上段先端に丸みを持つものをIII c類とする。京原遺跡(東八代郡境川村)²⁴⁾4号住居址出土例(25)・西田遺跡(塩山市)²⁵⁾31号住居址出土例(24)は、口縁部上段と中段の屈曲が不明瞭になる。最大径が肩部にあり、強く張る。姥塚遺跡(東八代郡御坂町)²⁶⁾59号住居址出土例(27)は体部内面にハケメがみられる。ユニークな形態であるため、III d類として分類しておく。III e類は、口縁部中段が大きく拡張した山陰系の口縁部をもつ大型品で、坂井南遺跡28号住居址(26)や西田遺跡5号溝(29)などで出土している。

III b類以降、口縁部は立ち気味で外反するものは無く、ハケメの在り方にも特徴が現れてくる。甲斐での製作技法が確立される段階である。

IV 類

口縁部はすべてヨコナデによって作られ、下段が肥厚する。III類に引き続き外反することはない。肩部外面のヨコハケを省略したものである。体部の形態は肩が張るものから長胴のものへ変化する。形態・製作技法の多様化が進み、在来化に拍車がかかり、独自の展開を見せる。

IV a類では、体部外面のケズリが明瞭に見られるようになり、仮ノ下遺跡(東八代郡八代町)²⁷⁾1号土壙出土例(32)では頸部内面にハケメをもつ。IV b類では体部が長胴化し始める。IV c類になると、姥塚遺跡98号住居址(43)、西田遺跡B区2号住居址²⁸⁾出土例(44)のように、体部はさらに長胴になり、最大径が体部中位に下がる。IV d類とした坂井南遺跡3号住居址の小型品(35)にも頸部内面にハケメがわずかに施されている。姥塚遺跡41号住居址(41)、西田遺跡37号住居址出土例(42)のように、体部内面にハケメを施すものが再び現れる。特に(42)に至っては口縁部は鋭く屈曲し、全く変容した型式が作り出される。型式変化の方向性を重視しIV e類としておく。

V 類

体部は肩が張らず長胴で、ハケメはもはやS字甕本来の在り方ではなく、装飾的なものになってしまう。

V a類とした宮ノ下遺跡(東八代郡豊富村)²⁹⁾1号住居址出土例(45)は体部外面のケズリがさらに顕著になる。西田遺跡5号溝出土例(46)は器壁が厚くなり、ハケメは装飾的なものとなる。甲斐での最終末のS字甕の形態とし、V b類としておく。

4 編 年

以上のように甲斐のS字甕を5類に大別し、さらにそれぞれを細分した。これらを1~8期に区分した中で、編年的位置づけを行う。S字甕の起源地である濃尾平野の、現在最も信頼できる廻間式土器編年³⁰⁾に併行関係を求める(第1表)。しかし再三強調しておくが、搬入品・

濃尾平野						甲斐				
廻間	S字甕					S字甕				
	0	A	B	C	D	I	II	III	IV	V
I式						1				
II式						2				
III式						3				
松河戸						4				
						5				
						6				
						7				
						8				

第1表 編年対照表

忠実な模倣品以外は対比できないのであり、5期以降は対比できるS字甕、つまり赤塚分類D類が存在しない。関東などでD類としているものは、どうみてもD類とはいがたく、やはり無理がある。よって5期以降の編年自体は濃尾平野とは対比できない³¹⁾。なお、今回提示するものはS字甕の単独分類であるため、起源地との対比にとどめ、畿内・北陸などの編年との併行関係についてはここでは触れない。

1期はI類の出現をもって設定する。これまでいま一つ鮮明ではなかった部分であるが、新たな資料の発見により、今回明確に位置づけることが可能となった。今後も出土点数が増えることを予想すれば、次の2期まで一定期間製作され使用されたことは十分に考えられよう。赤塚分類A類古段階と新段階の共伴をもとに、廻間I式後半期に対比できる。2期ではI類が残存し、II類が登場する。赤塚分類A類新段階とB類の共伴から、廻間II式前半期に対比できる。さらに、I c類、I d類、II d類のような、かなり変わった型式が登場する。3期ではII類とIII類が共伴する。赤塚分類B類新段階とC類古段階の共伴から、廻間II式後半期～廻間III式前半期に位置づけられる。4期はIII d類に代表される。これは赤塚分類C類に含まれることから、廻間III式後半期に位置づけることができよう。また肩部のヨコハケを省略するIV類への変化が始まる。5期からは自由な、個性的な製作の方向へ向かう。その後6期、7期とIV類は続き、

次第に地域色が強くなり広範囲に展開する。そしてV類が最後のS字甕となり、8期をもって、甲斐のS字甕は終焉を迎える。

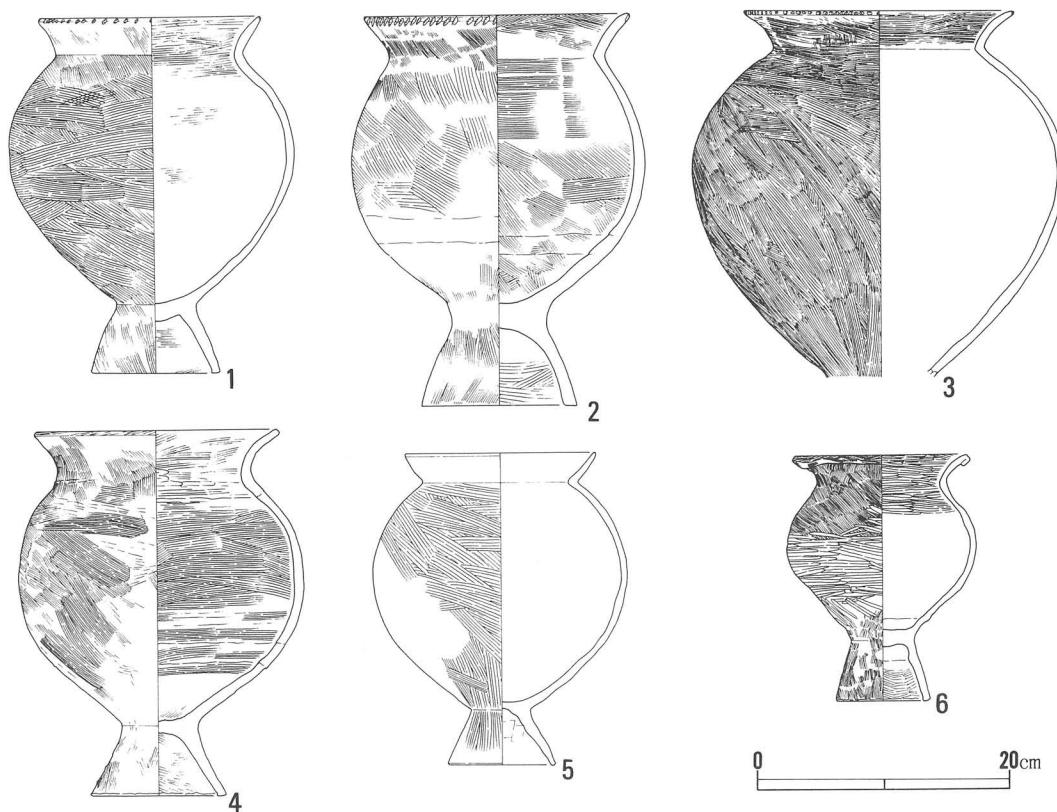
このように1期から4期まではわずかではあるが搬入品・模倣品がみられ、濃尾平野からの情報を受け入れ製作されていく。しかし受け入れつつも変化し始めていくのは目に見えて明らかである。ところが5期以降は今のところ、搬入品・忠実な模倣品ではなく、土器製作に関する情報が少なくなる。というよりは、むしろ拒否している感が強く、独自の型式として広がっていく。4期から5期へが、外来系から在来系への最大の画期となろう。

肝心な実年代であるが、これについては様々な問題が含まれているので、近年の動向と合わせて後述することにする。

5 考 察

(1) 甲斐の台付甕 (第2図)

甲斐においてS字甕が出現する以前の台付甕³²⁾は、在来系のものが主流を占める。それは口縁部の形態によって3形式に大別される。特徴的な口縁部・器壁の薄さなどのS字甕がもつ製



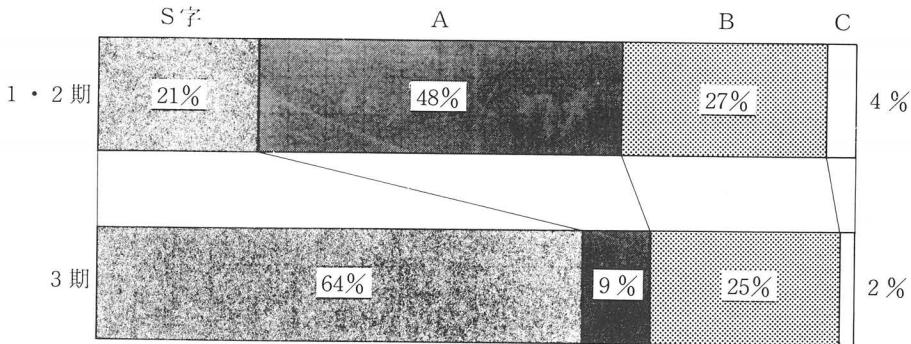
1・4. 米倉山B

2・6. 六科丘

3. 久保屋敷

5. 村前東A

第2図 甲斐の台付甕



第3図 台付甕の比率（1～3期）

作技法とは明らかに異なるのであるが、S字甕が出現する前後の段階をとらえる意味で重要である。ここでは在来系の台付甕の様相について触れておく。

台付甕A（1～3）は、く字に外反する口縁の端部に刺突を施したもので、内外面ハケメ調整を基本とする。甲斐においてはS字甕I類出現前後で最も点数が多い。久保屋敷遺跡出土例でS字甕II b類（第1図19）・III a類（第1図21・22）と共に伴している（3）は、（1・2）に比べ器壁も薄く、外面のハケメもS字甕を意識した作りになっている。

台付甕B（4・5）は、く字に外反する単純口縁をもち、内外面ハケメ調整のもの、ナデによるものがある。ただし村前東A遺跡出土例（5）は、口縁部は内彎し、体部形態は球形を呈し、他の地域に系譜を辿ることになろう。またごく少数ではあるが、体部に櫛描波状文を施したものも存在する³³⁾。

台付甕C（6）は折り返し口縁をもつもので、内外面ハケメ・ミガキ調整が施される。A・Bに比べ、出土点数は少ない。

次にS字甕出現前後の1～3期の台付甕の比率をみてみよう（第3図）。I類が出現し製作される1期・2期ではまだ台付甕Aが多く、台付甕全体の5割近くを占める。それが3期になると一転してS字甕が急増し6割を越え、他の台付甕を凌駕する。まさに「薄甕の時代」³⁴⁾の到来といえる。その後4期以降7期までさらに増加し続けるものと思われる。しかしすべてS字甕にとって変わらわけではなく、台付甕Bは残存しているようである。伝統的なものへの執着といったものを感じられる。

(2) 「甲斐型S字甕」の型式

かつて筆者は甲斐においては駿河の影響のもとに定着し、同様な型式変化を辿ることを考えた³⁵⁾。だが今回甲斐のS字甕の変遷を追い、編年を行うことによって、甲斐独自の地域色をもつことが明らかとなった。このような背景から甲斐のS字甕に独自の型式を与えることを考えてみたい。その特徴は既に明らかにしておいたが、ここでもう一度整理し、製作技法の違いを

明らかにしておく。

まず、口縁部について。屈曲を作る過程でヨコナデが早くから採用され、銳利さを欠き立ち気味となり、中段から上段への屈曲が不明瞭となる。これらは3期から始まる。端部は面をもたず丸みをもつものと沈線を巡らすものがみられる。

次に体部形態であるが、やはり3期から長胴化のものがみられる。頸部の窄まりが小さく、その分余計に肩の張りが弱い感じを受ける。4期・5期では球形になるものが存在しつつも、最大径は下がり、7期に至っては「なで肩」になり、最終的には肩部が厳密に存在しなくなる。

器壁の薄さについて。体部外面を薄くする技法にヘラケズリが採用され、5期以降次第に顕著になっていく。その後に施されるハケメも個性的になる。その在り方は「かき削る」のではなく、装飾的なものである。しかし、肩部のヨコハケの省略（4期）は、駿河・毛野地域に比べ当初予想していたより後まで残っている。

甲斐独自のS字甕は既にI類の段階から製作され、2期の段階から既にその萌芽がみられる。3期になると形態的な特徴となって現れ、4期を経てさらに5期において質的にも転換期を迎える。甲斐独自の型式をもつS字甕が顕著になる。このような流れの中で生まれたものをとりあえず「甲斐型S字甕」と呼ぶことにしたい。甲斐型S字甕は5期以降が中心となり、6期・7期のIV類・V類が最も特徴的な型式といえる。

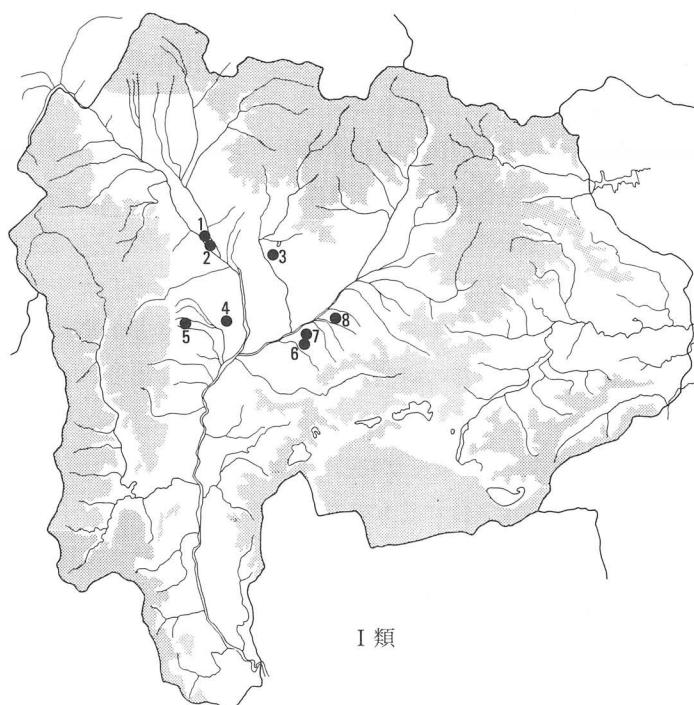
(3) 「甲斐型S字甕」の分布

第4図は初源的なS字甕であるI類と、甲斐型S字甕の特徴的な型式であるIV類・V類の分布図である。上図と下図では、遺跡の分布に一見あまり変化がないように見えるが、この中にはいくつかの拠点となる遺跡がみられ、注目することができる。

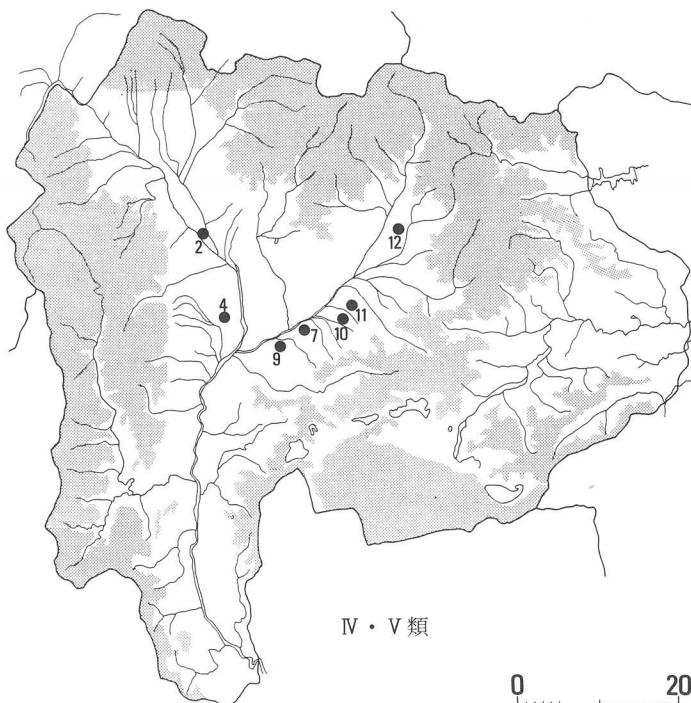
I類が出現する1期には、甲府盆地南部に米倉山B遺跡、東山北遺跡、2期には北西部に坂井南遺跡、西部に村前東A遺跡、そして3期になると盆地東部に西田遺跡といった大規模な集落址が現れ、その後一挙に分布域を広げる。その中で特に坂井南遺跡、村前東A遺跡、西田遺跡は拠点的な集落として存在し続け、6期・7期、あるいは8期まで長期間営まれる。甲斐のS字甕は、これらの遺跡を核にして周辺に広がるものと思われる。

またかつてはS字甕の新旧と搬入経路との関わりから、定着の時間的な差をも想定した³⁶⁾。それは濃尾平野廻間式土器が、東山道・東海道を経由し拡散する動き³⁷⁾とも連動するものであった。それが資料の増加によって、I類が甲府盆地のほぼ全域から出土していることが明らかとなった。そうすると駿河湾東部地域よりも先にもたらされたことも考えられ、定着の時間差・地域差は存在しないのかもしれない。しかし、東山道・東海道に挟まれた地理的な環境にも左右されるのが甲斐の特徴もある。それだけに東山道・東海道を経由し甲斐へ入ってくる間にも、多岐にわたる経路を辿っていると思われ、結果として甲府盆地南部にI類が存在することに問題はないであろう。

甲斐のS字甕は、製作技法の他、こういった複雑な要素が絡み合って展開する。濃尾平野から山を越え、海を渡り、甲斐へ受け入れられる。そして甲斐型S字甕として定着するのである。



1. 後用遺跡
2. 坂井南遺跡
3. 榎田遺跡
4. 村前東A遺跡
5. 長田口遺跡
6. 米倉山B遺跡
7. 東山北遺跡
8. 竹の内遺跡



9. 宮ノ下遺跡
10. 保ノ下遺跡
11. 姥塚遺跡
12. 西田遺跡

0 20 KM

第4図 S字甕の分布

(4) 実年代と時代区分について

近年畿内・東海を中心に土器編年の確立が進められてきたが、その一方では問題点も多い。特に実年代に関しては、これまでの年代観とは50年から100年のズレが存在する。その背景にある要因の一つに「邪馬台国時代」がある。最近赤塚次郎氏は、S字甕A類に象徴される東海系（濃尾平野系）土器の動きを、邪馬台国と狗奴国との抗争の中で生まれた難民の排出としてとらえた論考を発表している³⁸⁾。確かに東海系土器の出土量は群を抜いているが、北陸系土器もほぼ同時期の移動であり、邪馬台国、狗奴国と、S字甕A類とは別の動きのように思われる。これらは必然的に、どこまでが弥生土器でどこまでが古式土師器か、さらにどこまでが弥生時代でどこからが古墳時代か、という問題につながるのであるが、古墳の編年と土器編年が一致していない現状では困難な状況にあることは近年の研究状況からも明らかである。ましてS字甕のみで言及できる問題ではない。

邪馬台国云々は別として、畿内と関東の間をつなぐ東海の土器編年がしっかりとしてきた以上、関東で東海系土器が出土している遺跡、古墳（特に前方後方墳）の年代も繰り上げて考えなければならなくなる³⁹⁾。そういう傾向にあるとすれば、甲斐のS字甕の編年は、1期が3世紀前半、2期は3世紀中葉、3期は3世紀後半から4世紀前半に、4期は4世紀中葉となる。5期から7期は4世紀後半から5世紀前半に位置づけられる。そして8期は5世紀中葉になり、甲斐のS字甕は姿を消すものと思われる。

こういった背景から算出された繰り上がった年代に対して、東日本においてはまだまだ不安定な状況にあり、危惧を感じざるをえない。実年代についてはあくまでも慎重に対処したい。

6 まとめ

甲斐において、弥生時代末から古墳時代初頭の土器の中で大きなウェイトを占めるS字甕をやや詳細に分類し、編年を組み立ててきた。搬入品・模倣品をもとに併行関係を求め、赤塚分類C類までは対比することができた。しかし大部分は赤塚分類に対比できない独自の型式変化を辿るものであり、これらについては「甲斐型S字甕」として独立させることを試みた。それはバリエーションに富み、実に多彩な変化をみせる。その変遷をとらえたことは、今後様式論へ展開させていく上で大きな意味があると思われる。今後の動向に注目しつつ、本稿を閉じることにする。

本稿を執筆するにあたり、次の方々には、資料の実見に際しご配慮いただいた。記して感謝の意を表したい。

赤塚次郎、岡野秀典、坂本美夫、末木 健、中山誠二、野代幸和、山下孝司（敬称略）

註

- 1) 山梨を代表する地名として「甲府盆地」がよく使われるが、ここでは他の地域に合わせ旧国単位の「甲斐」とする。
- 2) 大參義一 1968 「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』 XLVII
- 3) 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号
- 4) 赤塚次郎 1986 「『S字甕』覚書'85」『年報 昭和60年度』財愛知県埋蔵文化財センター
- 5) 中山誠二 1986 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集 I』山梨県考古学協会
- 6) 山下孝司 1988 『坂井南』韮崎市教育委員会
- 7) 橋本博文 1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性—』雄山閣
- 8) 小林健二 1991 「甲府盆地におけるS字甕の定着について」『古文化談叢』第26集 九州古文化研究会
- 9) 比田井克仁 1985 「外来土器の展開—古墳時代前期の東京を中心として—」『古代』第78・79合併号 早稲田大学考古学会
- 10) 赤塚次郎 1986 「『S字甕』について」『欠山式土器とその前後』東海埋蔵文化財研究会
- 11) 加納俊介 1990 「S字甕とS字甕もどき」『マージナル』No.10 愛知考古学談話会
- 12) 加納俊介 1987 「用語に関する2・3の問題」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』東海埋蔵文化財研究会
- 13) 註6)と同じ。
- 14) 山下孝司 1989 『後田遺跡』韮崎市教育委員会
- 15) 中山誠二・丸山哲也 1991 「村前東A遺跡」『年報7 平成2年度』山梨県埋蔵文化財センター
- 16) 小野正文他 1992 「米倉山B遺跡」『年報8 平成3年度』山梨県埋蔵文化財センター
- 17) この他、榎田遺跡（甲府市）、長田口遺跡（中巨摩郡檜町）、東山北遺跡（東八代郡中道町）、また昨年行われた坂井南遺跡の調査でも方形周溝墓から多数出土している。山下孝司氏の御教示による。
- 18) 中山誠二・小林健二 1991 「山梨県における弥生時代後期土器の様相」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
- 19) 赤塚次郎 1992 「S字甕とカメ」『庄内式土器研究 II—庄内式併行期の土器生産とその移動—』庄内式土器研究会
- 20) 濃尾平野と甲斐のS字甕を比較する機会を得たが、肉眼による観察でもその違いは明らかである。赤塚次郎氏の御教示による。
- 21) 末木 健・野代幸和 1993 「東山北遺跡」『年報9 平成4年度』山梨県埋蔵文化財センター
- 22) 米田明訓・保坂康夫 1984 『久保屋敷遺跡』山梨県教育委員会
- 23) 10は器種分類上の問題として台付甕ではないのであるが、明らかにS字甕から派生したものである。「例外的な存在」としてではなく、今後はこういったものにも目を向けるべきではないだろうか。
- 24) 萩原三雄他 1974 『京原』山梨県教育委員会
- 25) 第1図17・18・24・28・29・31・33・34・36・42・46は第2次調査で出土した資料である。
- 26) 末木 健他 1987 『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会
- 27) 渡辺礼一 1984 「III 仮ノ下遺跡」『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・仮ノ下遺跡』山梨県教育委員会
- 28) 山崎金夫 1978 『西田遺跡—第1次発掘調査報告書—』山梨県教育委員会
- 29) 宮ノ下遺跡は1989年に豊富村教育委員会が行った試掘調査で、古墳時代前期の住居址・溝などが発見されている。
- 30) 赤塚次郎 1990 「V 考察」『廻間遺跡』財愛知県埋蔵文化財センター
- 31) 廻間様式に後続する松河戸様式の範疇でおおむねとらえられるものと思われる。
- 32) 甲斐ではこの時期、中部高地系の平底甕も存在するが、ここでは台付甕のみを取り上げる。
- 33) 坂井南遺跡28号住居址での出土例がある。

- 34) 石野博信 1990 「5 古墳前期の厚甕と薄甕」『古墳時代史』雄山閣
- 35) 註8)に同じ。
- 36) 註8)に同じ。
- 37) 註30)に同じ。
- 38) 赤塚次郎 1991 「S字甕の移動」『歴博フォーラム 邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館
赤塚次郎 1992 「東海系のトレース－3・4世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』vol.45
- 39) 白石太一郎 1991 「邪馬台国時代の畿内・東海」『歴博フォーラム 邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館

なお、米倉山B遺跡、東山北遺跡、西田遺跡第2次調査、宮ノ下遺跡の資料は正式な報告はされていないが、調査担当者の了解をえて紹介させていただいた。